

文部科学省事業

令和2年度 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

# 令和元年度指定 WWL コンソーシアム構築支援事業 研究報告書

## 第2年次

令和3年3月

国立大学法人金沢大学

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

# 目 次

第 1 章	令和 2 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業の取組（概要）	2
第 2 章	令和 2 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校における取組	9
	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校における取組	9
	石川県立金沢泉丘高等学校における取組	23
	石川県立金沢二水高等学校における取組	25
	石川県立小松高等学校における取組	27
	石川県立七尾高等学校における取組	28
	富山県立高岡高等学校における取組	30
	福井県立高志高等学校における取組	31

## 第1章 令和2年度WWLコンソーシアム構築支援事業の取組（概要）

### 1 事業の実施期間

令和2年4月23日（契約締結日）～令和3年3月31日

### 2 事業拠点校名

学校名 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校  
 学校長名 中澤 宏一

### 3 構想名 持続可能な世界を実現し、Society5.0を牽引するグローバル・リーダーの育成

### 4 構想の概要

本構想は、北陸圏域の高等学校、海外の高等学校、関連する機関により「北陸ALネットワーク」を形成し、組織的・継続的に“持続可能な世界を実現し、Society5.0を牽引するグローバル・リーダー”を育成するものである。

拠点校において実施してきたスーパーグローバルハイスクール事業（以下：SGH）の課題探究型課程をベースに、国内外の連携校等における取組や各校が立地する地域の異なる経済・文化・歴史等の社会的背景も含めた多様な視点、協働機関による専門的視点からの指導等を取り入れることにより、教育カリキュラムを深化させる。さらに、高校生の段階から金沢大学が有する海外ネットワーク等も活用した国際性と、アドバンスト・プレイスメント（以下：AP）による高い知識を身に付けさせる取組を加え、社会が抱える複雑な課題に立ち向かう“新たなグローバル・リーダー”育成モデルを確立し、広く全国へと発信する。

### 5 教育課程の特例の活用の有無

無し

### 6 管理機関の取組・支援実績

#### (1) 実施日程

業務項目		実施期間（令和2年4月23日～令和3年3月31日）												
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
ネットワークの 管理運営	運営会議等の設置・ネットワーク運営			← 各連携校との協議 →					○	← 各連携校との協議 →			○	
	運営指導委員会の設置・評価	←					委員の選出・委任						○	
	国内外のネットワーク強化	←			連携校以外の高校との連携開拓								→	
アドバンスト・ プレイスメント (AP)の実施	新たなAPの開発			← 数理データサイエンスをベースとした高大接続にかかるAPの開発 →								R3年度より「データサイエンス基礎」を開講		
	既存事業を活用した APの実施	グローバル・ サイエンス・ キャンパス				← 募集 →	○	← 一次選抜 第1ステージ (1年目) →	○	← 二次選抜 第2ステージ (2年目) →	○	← 第3ステージ (2年目・3年目) →	○	
										○	← 成果発表 →			
											○	← 最終報告 →		
	日本数学 A-lympiad							← 募集 →	○	← 開催 →	○	← 結果発表 →		

#### (2) 実績の説明

#### 2020年度の構想計画に係る取組の実績

##### (2) - ① ネットワークの管理運営

##### ・運営会議等の設置・ネットワーク運営

本事業の実施にあたり、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対面での会議の開催や海外渡航等の移動に制限が生じていたが、令和元年度に構築した国内外とのネッ

トワークを基盤とし、Zoom等のオンラインシステムを活用して管理機関、拠点校、連携校、各県教育委員会、海外機関等との迅速な情報共有を図った。さらに、新たな情報共有・情報発信の場として、オンライン上で動画やポスター等の掲載による成果発表、国内外の高校生とのディスカッションや情報発信を行うことを可能とするプラットフォームを構築するに至った。また、管理機関の長を議長とする「北陸ALネットワーク運営会議」を令和2年11月に開催し、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を踏まえた拠点校及び各連携校の実施計画等、事業全体の進捗状況について確認した。さらに、令和3年3月にも本運営会議を開催し、令和2年度を通じた事業全体に関する進捗管理や次年度の事業運営の在り方について確認した。（【実施体制の整備】a,b,c, 【ALネットワークの形成】a,b,g）

- ・運営指導委員会の設置・評価

運営指導委員会では、前年度に引き続き、本事業における学びの在り方等について、報告書に基づき、専門的見地から検討し、指導・助言をいただいた。（【実施体制の整備】d）

- ・国内外のネットワーク強化

令和元年度に構築した関西のWWLコンソーシアム構築支援事業拠点である関西学院大学との連携に加え、令和元年度に拠点校である金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校、石川県立金沢泉丘高等学校、石川県立金沢二水高等学校、石川県立金沢西高等学校の4校で行った合同課題研究発表会に、令和2年度においては、新たに金沢高等学校、金沢学院高等学校、石川県立大聖寺高等学校、石川県立金沢錦丘高等学校、宮城県仙台二華高等学校、福井県立若狭高等学校、海外からシンガポール・ナショナル・ジュニアカレッジ（NJC）が加わるとともに、アドバイザーとして民間企業や、地方公共団体、教育機関等の専門家が参画し、規模を拡大して探究成果発表会を開催した。また、オンライン上に継続的にディスカッション・情報共有を行うプラットフォームを構築した。（【研究開発・実践】b）

管理機関が「カリキュラム・アドバイザー」を2名配置し、カリキュラム・アドバイザーを中心に拠点校教員と協働し、令和元年度に連携体制を構築したNJCと、Slackを活用した共同のワークスペースを設置するとともに、Zoom等を活用して、協働プログラム開発に係る遠隔会議を複数回行い、連携を強化した。NJCとは、引き続きZoom等を活用した意見交換を行うとともに、令和3年度は現地でのフィールドワークを行う予定である。また、NJC主催のイベントへの参加の提案を受ける等、更なる連携の強化が進んでいる。（【財政等支援】a,b, 【ALネットワークの形成】d）

## （2）-② アドバンストプレイズメント（AP）の実施

- ・新たなAPの開発

管理機関である金沢大学において、高大接続による大学教育の先取り履修として、大学生を対象とした「データサイエンス基礎」を高校生向けに開講するための具体的な授業内容等を検討し、令和3年度に高校生向けに開講することとしており、準備を進めている。（【研究開発・実践】g,h）

- ・既存事業を活用したAPの実施

管理機関である金沢大学における既存事業を活用したAPとして、「日本数学A-lympiad」や「グローバルサイエンスキャンパス」（以下GSC）を実施しており、令和2年度「日本数学A-lympiad」では拠点校から43名、連携校から38名が参加し、全体では、14県から68チーム、259名が参加している。令和2年度は拠点校の参加チームが優秀な成績を収め、オランダで開催される「Math A-lympiad」に参加する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により中止となった。「GSC」では、拠点校から7名、連携校から18名が参加しているほか、北陸圏のみならず、神奈川県や兵庫県、長野県等の高校生も参加している。

これらの活動を通して、学生は自己の教養を高め、思考力と判断力を養成している。（【研究開発・実践】h）

## 管理機関の支援

### ・人的支援

人的支援として、管理機関が大学であることの強みを活かし、拠点校、連携校への留学生の派遣や Zoom 等を活用したオンラインでの交流を行った。ポスター形式やワークショップ形式でのプレゼンテーションやディスカッションを英語で行うことにより、実践的な英語力の養成を図ることが可能となった。例えば、SGH 事業から継続して、管理機関から連携校である金沢泉丘高等学校へ留学生の派遣を行っており、令和2年度は Zoom 等を活用し英語によるディスカッションを行った。また、石川県立小松高等学校における交流会において留学生を派遣し、高校生から留学生へのインタビューやディスカッションをしながら、文化交流等の機会となった。

さらに、連携校である石川県立七尾高等学校へ都市計画や地域経営に造詣の深い教員を派遣し、探究活動の展開を推進した。（【財政等支援】 a,b）

### ・財政的支援

管理機関である金沢大学の自主財源等により、AP として日本数学 A-lympiad や GSC を実施した。また、本事業の永続的な実施に向け、昨年度に引き続き、拠点校において、グローバル・リーダー育成基金を運用している。（【財政等支援】 b,c）

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目		実施期間（令和2年4月23日～令和3年3月31日）											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバルな社会課題カリキュラム開発	SDGsを題材とした教科指導 地域課題研究・グローバル課題研究の展開							地域課題研究					レポート提出
	新たな科目の開発・実施							グローバル課題研究					探究発表会 レポート提出
国内外の高校とのネットワークによる活動	連携校等とのSDGs共同研究							NJCとの協働研究や他校との連携					
海外研修/アジア高校生架け橋プロジェクトにおける海外高校生受入	海外研修			新型コロナウイルス感染症拡大のため中止：オンラインを活用した交流等を実施									
	架け橋プロジェクト受入											留学生受け入れ（中国より）	
高校生国際会議の開催	留学生とのグローバル・ディスカッション							グローバル・ディスカッションの実施（オンライン）					
	国際会議の開催							高校生国際会議開催準備					高校生国際会議開催

(2) 実績の説明

2020年度の構想計画に係る取組の実績

(2) - ① グローバルな社会課題研究のカリキュラム

・SDGsを題材とした教科指導 地域課題研究・グローバル課題研究の展開

管理機関に配置したカリキュラム・アドバイザーと拠点校教員が協働し、地域課題研究に係るプログラム等を実施するとともに、グローバル課題研究に係るプログラム等の開発を進めた。

地域課題研究では、昨年度に引き続き、「地域活性化プロジェクト」として①地域の課題を自分たちで発見し、②実社会で生きる方々を巻き込んで（協働）、③高校生らしい発想で解決策を提案・実践する課題解決学習に取組み、グローバル社会と繋がる地域社会について、主体的に認識を深めた。また、「地域活性化プロジェクト」においては、「平和町プロジェクト」として住民アンケートを実施し、その結果を分析し、街づくりのヒントとなる情報を発信する活動を行った。同様に「地域活性化プロジェクト」の1つとして堅町を対象とした「堅町 Art Spiral」において、「かなざわ未来芸術祭」のオンラインでの開催に向け、金沢21世紀美術館や堅町商店街との協力を得て、新型コロナウイルス感染症拡大の時代における芸術祭の在り方を探究する活動を展開している。さらに、コロナ禍におけるフィールドワークの充実を図ることを視野に、10月29日（木）～30日（金）に加賀現地学習を行い、フィールドワーク及び研究内容の中間報告会を行った。

グローバル課題研究では、大きなテーマとして「Sustainable City & Communities」を設定し、生徒一人一人が自ら研究テーマを決め、研究に取り組んだ。研究テーマごとに6つのゼミを形成し、ゼミごとに Slack を活用したワークスペースを作り探究活動を行った。テーマ決めにおいては、①「金沢から世界へ」、グローバルの意味を「共感」ととらえ、地域の声を聞いて内容を深めること、その結果「他の国ではどうだろう」と国を超えて考えること。②自分の強みを生かしたオリジナリティのあるテーマを設定すること。自分が深く研究してみたいこと、自分の人脈を活かす研究、自分の生き様が活きるような研究にすることについて指導を行った。8月と12月に Zoom 等を利用して留学生に向けた発表会を開催し、研究内容を留学生に向けて英語で発表するとともに、ディスカッションを行った。さらに、NJC との協働研究を行うゼミにおいては、Zoom を活用したテレカンファレンスを複数回行った。グローバル課題研究の研究成果は論文にまとめ

ることとしており、3月には県内外の高校生やNJCが参加する「探究成果発表会」を開催し、成果発表を行うとともに、学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを語り合い、交流を行った。また、「探究成果発表会」には、社会人が助言者として参画し、専門的知見を含む多様な知見による学びを深めた。（【研究開発・実践】a,b,c,e,f）

・新たな科目の開発・実施

拠点校における新たな科目開発については、1年次から国際的な素養を育て、有効な海外交流に繋げるための新たな教科であり、専門研究を推し進める一方で押さえるべきスキルやコンピテンシー、マインドセットを教授し、教科の枠を超えて、各教員の強みを生かすことのできる授業として令和元年度に「国際教養 基礎」を導入・実践するに至っているが、令和2年度も引き続き、カリキュラム開発を行い、Zoom等を活用し、「帰納的論証」、「マインドセット」、「思考ツール」の習得を目的として授業を展開した。今後は、総合的な探究の時間との親和性がより高まるよう工夫し、実社会で求められているスキルを身につけるカリキュラムの開発を目指す。（【研究開発・実践】a,c,f）

(2) - ② 国内外の高校とのネットワークによる活動

・連携校等とのSDGs共同研究

カリキュラム・アドバイザーを中心に拠点校教員と協働し、SlackやZoom等を活用して、NJCと情報交換や意見交換を行い連携を強化するとともに、NJCと「新型コロナウイルスが増加する状況下で、コミュニティの需要・要求を支えるように、公衆衛生制度がどう進化すべきか？」等をテーマに協働研究を展開した。さらに、連携校以外の高校が参加するディスカッションの機会を設け国内外のネットワークの強化に取り組んだ。また、令和元年度に拠点校である附属高等学校、金沢泉丘高等学校、金沢二水高等学校、金沢西高等学校の4校で行った合同課題研究発表会に、令和2年度においては、新たに国内から6校、海外から1校が参加し、延べ390人の生徒による探究成果発表会を開催した。（【研究開発・実践】b）

(2) - ③ 海外研修/アジア高校生架け橋プロジェクト

・海外研修

令和2年度は、拠点校及び連携校において、各校が設定する課題研究に応じ、ディスカッション等で深めた知見を基に、高校生が適地においてフィールドワーク等を実施する海外研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、海外渡航を取りやめた。代替として、オンラインの活用等により次のような取組を行った。拠点校においてZoom等を活用し、海外の生徒や様々な分野の専門家等が参画する探究成果発表会等をオンラインで開催し、国や学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを語り合い、さらに様々な分野の専門家からの指摘を得ることを通して、多様な文化や知見を学んだ。また、課題研究における留学生への発表会を実施し、英語によるディスカッションを通して交流を行った。さらに、オンライン上で国内外の高校生とのディスカッションや情報発信を行うことができるプラットフォーム（Webシステム）を構築した。（【研究開発・実践】d）

・架け橋プロジェクト受入

令和2年度は、アジア高校生架け橋プロジェクトにおいて、中華人民共和国からの留学生を1名受け入れ、拠点校においてともに学ばせることで、異なる地域、文化におけるそれぞれの差異に触れる機会を提供した。数学の授業では、本校生徒との学び合いで学習理解を深め、また、漢文の授業では中国での説話の解釈を紹介した。（【実施体制の整備】f,h, 【研究開発・実践】i）

(2) - ④ 高校生国際会議について

・留学生とのグローバル・ディスカッション

拠点校、連携校への留学生の派遣やZoom等を活用したオンラインでの留学生との交流を行った。ポスター形式やワークショップ形式でのプレゼンテーションやディスカッションを英語で行うことにより、実践的な英語力の養成を図ることが可能となった。例えば、SGH事業から継続し

て、管理機関から連携校である金沢泉丘高等学校へ留学生の派遣を行っており、令和2年度はZoom等を活用し英語によるディスカッションを行った。また、石川県立小松高等学校に留学生を派遣し、高校生から留学生へのインタビューやディスカッションをしながら、文化交流等の機会となった。（【財政等支援】a,b）

- ・国際会議の開催

管理機関主催で、拠点校を中心に国内外の高校生や社会人が参加し、ディスカッション等を通して、行動変容を目指す目標設定の場としての国際会議を当初計画より前倒しし、令和2年度に開催した。国際会議はオンラインで開催し、国内からは各連携校だけではなく、長野県長野高等学校、長野県上田高等学校、福井県立敦賀高等学校が参加し、海外からは、エジプトやアメリカ等から生徒が参加した。さらに、助言者として民間企業や教育機関等の社会人が参画した。テーマとして「パンデミックの時代にどう生きるか」を掲げ、グローバルな社会課題について、生徒が社会人や海外の高校生と対話することを通じて、自身の行動や価値観を見直すとともに、行動変容に繋げるための学びを深めた。（【AL ネットワーク形成】e,f）

## 8 目標の進捗状況、成果、評価

- ・管理機関における進捗状況・成果

令和2年度においては、令和元年度に構築したネットワークを基盤に、取組をさらに深化させることを目指しており、管理機関にカリキュラム・アドバイザーを2名配置し、地域や海外との連携の強化を進め、教育カリキュラムの深化を進めた。ネットワークの形成に関し、新たに長野県や宮城県等の高等学校の探究成果発表会への参画により、北陸圏域を超えた地域ともネットワークの拡大・強化が進んでいる。さらに、関西のWWL拠点である関西学院大学とのWWL・SGH×探究甲子園との共催等、各地域にあるWWL拠点同士の連携体制も継続して構築されている。

また、高大接続にかかるAPについて、すでに記載のとおり、これまで管理機関で実施している事業を引き続き行っていくとともに、高大接続科目として、大学生を対象とした「データサイエンス基礎」を高校生向けに開講するための具体的な授業内容等を検討し、令和3年度に高校生向けに開講することとしており、高校生の先取り履修の環境整備が進んでいる。これらのことから、令和2年度事業実施計画書をベースに、遅滞なく進捗している。（8 目標の進捗状況、成果、評価 a~c）

- ・拠点校における進捗状況・成果

拠点校においては、令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大により、海外渡航の中止や休業期間の影響や行事等の開催方法の見直しを余儀なくされたが、管理機関に配置したカリキュラム・アドバイザーを主導的立場に立て、1年次から3年次に通貫したカリキュラム開発を目指し、特に令和2年度は2年次におけるカリキュラム開発を中心に行ってきた。

「グローバル課題研究」において（2）-①に記載したとおり具体的な活動に至っている。多様な視点、専門的視点からの指導等を取り入れることにより、教育カリキュラムを深化させるという観点も踏まえ、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下においても、NJC や管理機関との連携によるオンラインを活用した海外交流や、事業連携校、県内外の高校との連携、様々な分野の専門家の参画によるディスカッション等を通して、探究活動における学びを深めた。

さらに、高校生国際会議を当初計画より前倒しして開催するに至り、拠点校において当初の計画どおり進捗しているといえる。

- ・連携校における進捗状況・成果

連携校においても、拠点校と同様に新型コロナウイルス感染症拡大により、海外渡航の中止や休業期間の影響や行事等の開催方法の見直しを余儀なくされたが、オンラインを活用する等、様々な工夫を凝らし、教育カリキュラムの開発や深化が進んでいる。例えば金沢泉丘高等学校においては、オンラインを活用した留学生との交流や、大学院生からオンラインで研究指導を受ける機会を設けた。また、連携校以外に国内外の高校生が参加する探究成果発表会や高校生国際会議への参加を通して、北陸圏域を超えて学びを深めた。

- ・評価について

令和2年度のWWL事業の達成状況に対する評価は本報告書を用い、運営指導委員会の指導を受けた。（【実施体制の整備】d）

## 9 次年度以降の課題及び改善点

- ・管理機関における課題及び改善点

対面での会議の開催が困難な状況であったことを踏まえ、教員の情報共有や事業の具体的な方策の検討をより機動的に行うことができるように、拠点校と連携校における事業の具体的な企画

- ・立案を担う小委員会を立ち上げることとしたい。また、令和3年度から実施予定である高校生の先取り履修を含め、先導的なモデルとなる取組を推進するとともに、令和2年度に構築したプラットフォームを活用し、情報発信や自走に向けての新たな連携先の開拓を積極的に進めることとしたい。

- ・拠点校における課題及び改善点

これまで述べてきたように、新型コロナウイルス感染症拡大により、休業期間や実施方法の見直しが求められた中、管理機関に配置したカリキュラム・アドバイザーと協働し、「グローバル課題研究」のカリキュラム開発等、明確な成果を上げている。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大により、海外研修等が中止となり、オンライン等を活用し代替事業を展開したが、学生が現地での経験を通して得られる学びの機会を設けられなかったことは課題である。令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況を注視しながら、海外研修の実施を行うとともに、引き続き探究活動のさらなる深化を進めるほか、課教員間での次年度担当への引継ぎ等、情報共有体制の強化を行う。

## 第2章 令和2年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校における取組

### ●金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校における取組

#### 1. SDGs を題材とした特色ある取り組みについて

##### (1) 令和2年度「地域課題研究」

###### ①目的とねらい

現在、日本の地域社会は、人口流出や経済・社会の持続性の低下等の問題を抱えており、それに伴って学校教育界においても「人口減少を克服し、地方創生を成し遂げるため、人口、経済、地域社会の課題に一体的に取り組むこと、また、そのために国民一人一人がより主体的に社会を創り出していくこと」が謳われるようになった。そこで、こうした地域課題に対して、高等学校が自治体、高等教育機関、産業界等との協働を通じて、地域課題の解決等の探究的な学びが文部科学省によって推進され、学校現場において「社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む」ことが求められる時代となった。

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校では、令和2年度も WWL コンソーシアム構築支援事業の一環として、1年次の「総合的な探究の時間」において「地域課題研究」を行っている。前述のような国家的要請を受け、附属高等学校では平成26年度「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」事業の研究開発校に指定されていた時期から現在に至るまで、この地域課題研究が、一定以上の「成果」を挙げているものとして継承されてきた。また、昨年度には、生徒のフィールドワークを可能とすることにより、さらに地域に軸足を置いた実践となった。そのため、令和2年度も、基本的には昨年度の形式を踏襲した形で「地域課題研究」を実践した。地域活性化プロジェクトのテーマは、「身近な地域やそこに暮らす人びとを幸せにする方法を提案・実践しよう!」である。このプロジェクトを通じ、生徒は①地域の課題を自分たちで発見し(課題発見)、②実社会で生きる方々を巻き込んで(協働)、③高校生らしい発想で解決策を提案・実践する(独創・実践)課題解決学習に取り組み、グローバル社会とつながる地域社会について、主体的に認識を深めることが期待されている。

###### ②令和2年度の改善点

附属高等学校において、総合的な探究の時間は令和2年度時点で1～3年次を貫いて設定されている。そのため、3年間でどのような力を身につけさせるか、という見通しが必要になる。なぜなら、3年間を通じた計画を用意しておかなければ、単年ごとに分断されたプログラムとなり、教育効果を最大限に発揮することができなくなってしまう可能性があるからである。

図1は、この3年計画における、身につけさせたい力を羅列し、モデル図にして表したものである。1年次では主に「研究力」、2年次では「実践力」、3年次では「自己省察力」を育成するプログラムを構想した。昨年度までは「地域活性化PJT」において、1年次から問題解決に重きが置かれ、より「実践」に傾倒していた点を、令和2年度は課題設定に重きを置き、「研究」を重視する構成に変更した。コンピテンシーの育成順序として、その方がより適切であると判断したからである。

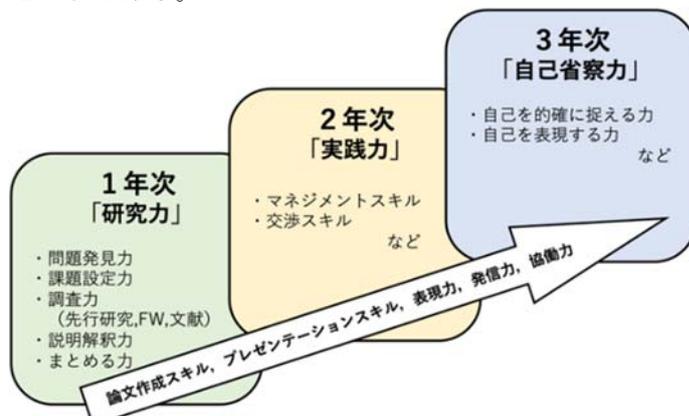


図1 令和2年度入学生の「総合的な探究の時間」における3年計画の構想

### ③実施計画

本来であれば、4月から「総合的な探究の時間」が始まる予定であったが、新型コロナウイルスの流行に伴って、4月～5月の2カ月間にわたって生徒の登校が禁止となった影響で、表1に予定を変更した。

また、この研究プロセスの構築にあたっては、地域課題研究が「地域」を対象とすることから地理学との親和性が高いと考え、文化地理学における研究手順を参考にした。表1で示したように、研究プロセスを「地域探究期」と「プロジェクト計画・実行期」、「まとめ期」に大別しつつ、それぞれの期間をさらに細分化した。それぞれ、「地域探究期」においては「問題発見・予備調査期」、「課題設定・本調査期」、「説明・解釈期」を設定した。また、「地域還元期」においては「研究まとめ期」から「研究応用期」への流れにおいて、提案にとどまらず実践に移行する班を想定して、シームレスな時期区分とした。

表1 令和2年度1年次「総合的な探究の時間」の年間スケジュール

区分	月	日	5限	6限	備考
地域探究期	予備調査見 期・		5日までにオリエンテーション動画を見る。		教員が班分け
		6	5	問題意識共有・仮テーマ決め（オンライン組は国際教養基礎）	
			12	問題意識共有・仮テーマ決め（オンライン組は国際教養基礎）	
			19	予備調査・問題意識の文章化（オンライン組は国際教養基礎）	（評価返し）
			26	予備調査・問題意識の文章化（オンライン組は国際教養基礎）	（評価返し）
	課題設定 ・本調査期	7	3	予備調査・問題意識の文章化	（評価返し）
			10	予備調査・問題意識の文章化	プロセス評価
			17	課題設定のためのミーティング・本調査	
		8	3	本調査	
			夏休	本調査	
			21	本調査	※異学年発表会中止
		9	4	国際教養基礎	
			11	本調査	（評価返し）
			18	国際教養基礎	
			25	本調査	
		10	9	国際教養基礎	
			16	本調査	（評価返し）
			23	国際教養基礎	
			27	本調査	
			28	本調査	
			29	加賀現地学習（中間発表）	
		11	6	研究大会準備	発表動画製作
	20		国際教養基礎		
	21		研究大会	プロセス評価	
	解説明 期・	12	4	調査結果の説明・解釈に関するGD，追加調査	
			特時	国際教養基礎	プロセス評価
	地域還元期	研究ま とめ 期・	1	8	各グループ活動
15				国際教養基礎	
22				各グループ活動	（評価返し）
29				国際教養基礎	
2		5	各グループ活動	（評価返し）	
		19	国際教養基礎		
		26	各グループ活動		
振り返り 期		3	特時	各グループ活動	（評価返し）
			13	高校生オンライン探究発表会	
	特時		振り返り・まとめ，次年度へ向けてのオリエンテーション	プロセス評価・年度末評価	

#### ④評価方法

令和2年度、附属高等学校では「総合的な探究の時間」の評価方法を大きく見直した。これまでの評価方法は、担当教員が年度末に、通年の取り組みを総合的に評価し、文言に反映させる方法であった。しかし、この評価方法では生徒の成長過程を把握できず、また、教員の記憶も曖昧になり、適切な評価が行えないという問題点があると考えた。

そこで、令和2年度は、通年の取り組みを先に示した時期区分に合わせて評価する方式に変更した。各班の研究プロセスが適切に踏めているかを確認するためにも、2～3週間に一度の頻度でレポートを提出させ、それをもとにA～Eの5段階での評価とコメント返しを行った。なお、提出にはLMSコース(WebClass)のレポート提出機能を用い、提出ページ内に合わせて各時期区分における評価ルーブリックを掲示した。表3・表4がそれぞれ「問題発見・予備調査期」、「課題設定・本調査期」の評価ルーブリックである。問題発見・予備調査期においては、Cが到達目標として設定されており、「課題設定・本調査期」においてはBが到達目標として設定されている。それ以上の評価を得ると、年度末の成績における最終的な評価で最も良い文言が付与されることになる。

この評価システムによって、継続的に研究の進捗を確認することができるようになり、また、次の授業時間で何を生徒に考えさせるべきかを把握できるようになったことは、探究活動における教員の指導のあり方に関して、一定程度の意義を持つだろう。さらに、生徒たちも文章で研究内容を整理することができ、教員からのコメントを受けて研究プロセスを修正し、レポートの内容も改善していくというサイクルも見られるようになった。当然、全ての班がそのような良い循環構造を構築できていたわけではないが、わかりやすく目につきやすい「評価」という指標がモチベーションを生んでいたのではないかと推察される。実際に、1学期授業評価アンケートでは、「レポートなどを提出し、返却されるときに問題点が明確になって返ってくるので、グループで話すことがはっきりされるので、とても良いと思う」、「他の人とたくさん議論して文章を改善していくのがとても楽しいです」、「他の人と交流しながら、テーマの評価が上がったときは嬉しかった」など、このレポート提出による評価に対して、好意的なコメントも多かった。

表2 問題発見・予備調査期の評価ルーブリック

評価	評価基準
A	設定したテーマについて、その設定理由・問題意識を、予備調査で明らかとなった情報から、最適で詳細かつ具体的な根拠を挙げて説明している。
B	設定したテーマについて、その設定理由・問題意識を、予備調査で明らかとなった情報から、詳細かつ具体的な根拠を挙げて説明している。
C	設定したテーマについて、その設定理由・問題意識を、予備調査で明らかとなった情報から、具体的な根拠を挙げて説明している。
D	設定したテーマについて、その設定理由・問題意識を、予備調査で明らかとなった情報から、説明している。
E	設定したテーマについて、その設定理由・問題意識を、予備調査で明らかとなった情報から、説明しようと試みている。

表3 課題設定・本調査期の評価ルーブリック

評価	評価基準
A	問題意識に応じて設定した研究目標や仮説に基づいて、綿密な研究計画を立案し、効果的な調査を行っている。
B	問題意識に応じて設定した研究目標や仮説に基づいて、綿密な研究計画を立案し、調査を行っている。
C	問題意識に応じて設定した研究目標や仮説に基づいて、綿密な研究計画を立案している。
D	問題意識に応じて設定した研究目標や仮説に基づいて、研究計画を立案している。
E	問題意識に応じて設定した研究目標や仮説に基づいて、研究計画を立案しようと試みている。

⑤テーマ一覧

		テーマ
1A	1班	近江町市場という文化を守る
	2班	異学年交流について
	3班	読書方法と学力の因果関係探を探る
	4班	家庭のフードロス削減！
	5班	自転車と歩行者が双方とも安全に通行する方法の開発
	6班	SAS で SOS!
	7班	ポイ捨てを減らす取り組み&ポスター作り～ごみを一つ捨てる度、未来の幸せを一つ捨てている
	8班	No comfort No school life -置き勉にしかできないこと-
1B	1班	附属とチョコレート工場～目指せウィリー・ウィンカー～
	2班	休み方改革
	3班	時刻表と、生きる
	4班	加賀野菜の存続
	5班	上から鉛筆で書ける修正テープを作ろう
	6班	小学校区の改善について
	7班	ダストを出さない
	8班	迫るタイムリミット～哀しみの墓場～
1C	1班	ステイオンタブが秘めた可能性
	2班	No risk door ～SHIELD～
	3班	おいしいカップラーメン
	4班	非常食 in 自動販売機
	5班	非常食 in 自動販売機
	6班	コロナで避難所はどう変わる？
	7班	つまらない餅
	8班	料理教室を通じた日本語サポート

## (2) 令和2年度「グローバル課題研究」

### ①基本概要

2年生の「総合的な探究の時間」は、「グローバル課題研究」として、大きなテーマとして「Sustainable City & Communities」とし、個人研究で、一人一人がやりたい研究テーマに取り組んだ。個人研究に取り組むことや一人一人が研究を論文にまとめることは、昨年度の形と変わらない。しかし、立ち上げからコロナ禍でのスタートとなり、前年同様の話はほとんどなく、苦難の道のりだった。3月に急遽、新型コロナウイルス感染防止のため休校期間に入り、73回生2年グローバル課題研究は、休校期間中にスタートすることになった。休校に入る直前に、授業をせず3つのことを行った。①各クラスでSlackを作ったこと、これは休校期間中に、総合など授業も含め生徒たちと連携を密に行うために必要であった。②グローバル課題研究の趣旨を伝えること、ここでは「大きなテーマとして Sustainable City & Communities として、自分のやりたい研究テーマを提出すること、また、大きなテーマとして次のどれか？歴史文化、地域振興、経済、防災、環境、生活のうちどれか？」という指示を行った。③研究に対する考え方をすべてまとめた必携を生徒1人1人に与えた。そこから休校期間中に入り、その後、Slackによって生徒たちからテーマを集めた。それに基づいて6つのゼミを形成し、さらにそれぞれゼミごとにSlackでワークスペースを作った。それによって、ゼミごとに活動することが始まった。具体的には、休校期間中でも調査を行い、研究テーマに対して新たに得られた知見は何か？について、2週間に1度報告し、ゼミ担当の先生からアドバイスを受けるという活動を行っていった。そして、当面の共通目標として、「8月に留学生向けポスターセッションを行うからそこで発表できるように」ということを掲げて活動していった。

スタートするにあたって、まず考えたことは、前年度からの引継ぎ事項もあって、大きく次の3点であった。

①ゼミを作るなら「近いテーマの生徒同士で作ってより議論を活性化するように」作ること、協働研究も認めてもよい、内容を深めあう関係を作りやすい環境を目指そう。

②テーマ決めに対して、2つのことを強調した。①「金沢から世界へ」、グローバルの意味を特に「共感」と考えた。地域の声を聞いて内容を深めること、その結果「他の国ではどうだろう」と国を超えて考えること。②自分の強みを生かしたオリジナリティのあるテーマを設定すること。自分が深く研究してみたいこと、自己的人脈を活かす研究、自分の生き様が活きるような研究にしよう。

③ゼミごとのやり方を尊重する。総合の全体管理者としてゼミに対しゴールだけ設定すること。逆にプロセスは、ゼミ担当の先生に任せること、裁量権を与えること、そうすることでゼミの先生にも生徒の成長を一緒に考えてもらい、研究に責任をもってもらい、生徒とともに研究にモチベーションをもってもらおうことが大切だと考えた。

### ②留学生発表会

第1タームの目標として、8月の留学生発表会があった。金沢大学の留学生が附属高等学校に来校し、留学生に生徒が各自発表を行う。実際に学校が登校開始したのは6月からであったため、4～5月の約2カ月はオンライン上で研究し、6～7月の2カ月は登校しながら研究する形になった。しかし、8月の留学生発表会は「外部からの来校禁止」の状況のまま行う必要があったため、オンラインでの実施を目指すしかなかった。

オンラインでの実施ということで全体をどう設計するか？と考え、1つのZoomのアカウントで入ってもらい、ブレイクアウトセッションで留学生の数(15ブースほど)に分けて、生徒たちも同じ数だけグループ分けして、生徒と留学生をマッチングさせて1対1で発表とディスカッションを行うこととした。また、留学生発表以外の時間を持って余すのが勿体ないので、その裏で、他ゼミ同士の日本語発表も同時に行うことにした。



第2タームの目標として、12月の留学生発表会を掲げた。8月も12月も上記と同じ設計で行ったが、8月の発表会であがった反省点として、①音声の問題（ヘッドセットやイヤホンがあった方がいい）、②ポスターよりパワーポイントで発表した方がやりやすい、という反省を活かして、それらを修正した形で12月の発表会を行った。

ゼミ担当の教員や生徒の声でも、以下のような声があり、留学生発表会の価値を感じる事ができた。概ね、生徒、教員ともに、教育的価値が高い活動だったように感じている。

・うまく英語がでてこない、悪戦苦闘して一生懸命英語で伝えようとする生徒たちの姿が輝いてよかった。（教員）

・自分の英語がまだまだだなあと痛感した。伝えたくても伝えられなくて悔しかった。（生徒）

・金沢大学の留学生の指摘が鋭く、生徒たちにとって得るものが多かった。（教員）

・他のゼミ生の研究を聞くことで、勉強になることも多く、自分の今後の研究への示唆を得ることができた。（生徒）

しかし、問題点として、「英語で発表が全然できない生徒がいてその指導もゼミの教員で責任もつ」のが難しかった。実際、多くのゼミでは、内容面を高めることにほとんど時間を使うため、授業時間内で発表の時間を設けることが難しい。

### ③3学期の取り組み

最終的には、3月までに研究成果を論文にまとめる活動を行う。また、3月に1年2年合同で探究成果発表会を開催する予定である。これは、分科会形式で行い、それぞれの分科会ごとに外部アドバイザーとして社会人の方に研究を見てもらうことを考えている。そのときに、総合的な探究の時間をやる意義、すなわち、「高校生が主体的に社会課題を自分事としてとらえて、その解決案を大人にぶつける」ことが、シーンとして数多く生まれることを願う。

### ④成果と課題

成果（良い点）

- ・ゼミ担当者ごとのやり方を尊重し、そのゼミの生徒の発表に責任をもってもらうこと。
- ・専門性が近い者が集まることで議論が活性化した。
- ・本当に研究したいことを一人一人が研究テーマに設定した。

課題

- ・研究が行き詰まったときに解消できない。
- ・ゼミごとに価値観が違うので、評価の観点が違う。
- ・先生1人につき持っているテーマの数がばらばら。多い人は、10テーマ持っている人もいる。

### ⑤NJCとの協働研究

一部の生徒（以下N組）は、シンガポールナショナルジュニアカレッジ（以下NJC）と協働研究を行った。お互いに話し合った結果、令和2年度は、以下の4つのテーマに取り組むことになった。

N1：新型コロナウイルスが増加する状況下で、コミュニティの需要・要求を支えるように、公衆衛生制度がどう進化すべきか？

N2：新型コロナウイルスによるロックダウン対策は、生徒間の友情にどのような影響を与えたか？

N3：グローバル時代において、郷土食文化をどう保全していくか？

N4：グローバル時代において、伝統文化・伝統芸能をどう保全していくか？

テーマの決定経緯については、附属高等学校のゼミ（歴史・文化、地域振興、経済、環境、生活）、そして令和2年度なのでコロナというテーマを追加した7つを提示し、NJC側が合意したのが、環境とコロナであった。その後、具体的なテーマをNJCが上記のように提示して、テーマが決定した。

ディスカッションの機会として、テレカンファレンス（以下テレカン）を行った。テレカンは、2カ月に1回のタイミングで第1回7月27日、第2回9月11日、第3回11月27日、第4回1月15日の合計4回のテレカンが行われた。

別途、NJCと附属高等学校で同じSlackのワークスペースを持っており、テキストベースでのやりとりもできる環境になっている。それによって、研究の過程で聞いてみたいこと質疑応答したり、研究途中のファイルのやりとりを行ったりすることができる。

その毎回のテレカンの前には、アジェンダとそれまでの研究結果をパワーポイント資料でまとめる準備を行う。テレカンのときには、お互いの研究発表を行い、それについて生徒同士がディスカッションして、今後の方向性を確認する。



#### \* 協働研究の意義

- ・英語で伝えることができないもどかしさを経験し、さらに英語を学ぶ意識が高まる。本当にレベルが高い英語でのやりとりが経験できる。
- ・視野が広がる。そのテーマにまつわるシンガポールの文化的な背景や地理的背景を理解する必要があるため、異文化を理解するきっかけになる。
- ・研究の中身が深まる。例えば、「伝統食といっても、どういう定義で話を進めるか」、「友情とはどのような定義か」など、言葉一つとっても、どういう意味であるか、どこが共通項なのかをしっかりと定義しなければいけない。そのため、言葉の背景を探り、最も大切な特徴をとらえる研究活動が必要となる。それが、より深く研究内容を考えることにつながる。真の研究力が問われる。

#### \* 3学期の取り組み

N組の研究は「最後は、自分の学校内での研究をそれぞれしっかりまとめて発表しあおう、そしてその後に、一緒に協働で共通の研究テーマについてまとめよう。」となっている。最後に協働で扱うテーマは、「それぞれの研究テーマについて、国によって異なる部分はどこか、国を超えて共感できる価値観は何か、高校生が国を超えてできることは何か」ということである。その結果を1つのパワーポイント資料と一緒に作り、3月の探究成果発表会で一緒に発表を行う。

### (3) 令和2年度「探究成果発表会」

従来、総合的な探究の時間の成果発表会を近隣の3校と合わせて行ってきた。令和2年度はその発表会を拡大し、3月にオンラインで開催することになった。オンラインということもあり、県内外から多くの生徒が参加するプログラムとなった。以下にその要項を示す。

## 金沢大学 高校生探究成果発表会 要項

2021.3.3

### 1. 主催 金沢大学・金沢大学附属高校

※コーディネーター：金沢大学附属高校 WWL カリキュラムアドバイザー前田健志

### 2. 目的

- ・各カテゴリーの専門家からの指摘を得ることで、生徒自身が視野を広げたりや専門的知見を得たりする機会とする。
- ・学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを語り合い、同世代からの刺激を得て、今後の生徒の探究活動の一助になるような機会とする。
- ・従来から続いてきた附属・泉丘・二水・西高 4 校合同ポスターセッションの内容を充実・発展させ、4 校以外の学校も巻き込み拡大させる。

※泉丘高校も 令和3年 2 月 13 日に他校生とのディスカッションを企画しており、今後はこのように、合同ポスターセッションを複数回企画したりして発展させていく。

### 3. 日時：令和3年 3 月 13 日(土)(午前の部と午後の部)※参加生徒は午前 or 午後のどちらかに出席

- ・午前の部 9:00～12:30・・・9:00～接続開始、分科会ごとに開会宣言、その後 6 チーム発表
- ・午後の部 13:30～17:00・・・13:30～接続開始、分科会ごとに開会宣言、その後 6 チーム発表  
※1 発表 10 分、質疑応答 7 分、講評 3 分を目安とする。  
※「国際」分科会のみ別のタイムテーブル、使用言語は英語。  
(シンガポールの学校との協働)

### 4. 形式

- ・オンライン(Zoom)：分科会ごとに Zoom を立ち上げる。分科会ごとに 12 チーム、計 168 チーム(最大) ※原則として、発表生徒がそれぞれ画面共有をする。

### 5. 参加者

- ・金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校の WWL コンソーシアム事業の一環であり、附属高校 1・2 年生は全員が参加する。
- ・金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校：1 年 24 チーム、2 年 91 チーム(英語発表 8 チーム)  
石川県立金沢泉丘高等学校：9 チーム(英語発表 1 チーム)  
石川県立金沢二水高等学校：8 チーム(午前 4 チーム午後 4 チーム)  
石川県立金沢西高等学校：4 チーム(午前) 石川県立金沢錦丘高等学校：5 チーム  
金沢高等学校：5 チーム(午後) 金沢学院高等学校：1 チーム 石川県立大聖寺高等学校：8 チーム  
福井県立若狭高等学校：2 チーム(英語発表 2 チーム) 宮城県仙台二華高等学校：4 チーム(午後)  
National Junior College：2 チーム
- ・他校教職員の見学者多数

6. 外部アドバイザー一覧

	分科会	外部アドバイザー	
		午前	午後
1	文化	眞鍋知子(金沢大学)	
2	地域振興・経済(1)	村上純一郎((株)akeru)	
		棚橋隆博(日本政策金融公庫)	山田知佳(日本政策金融公庫)
3	地域振興・経済(2)	山野広貴(有限責任監査法人トーマツ)	
		坂井秀雄(北陸財務局)	山田雄祐(北陸財務局)
4	防災・安全	亀川哲志(岡山大学)	
5	環境(1)	尾張由輝也(自生塾)	
6	環境(2)	笠間彩(金沢市役所)	
7	教育(1)	飯貝誠(タビト学舎)	
8	教育(2)	仁志出憲聖((株)ガクトラボ)	
9	健康・医療(1)	山本尚毅(河合塾)	
10	健康・医療(2)	田邊浩(金沢大学)	
11	工学・IT・テクノロジー	杉森公一(金沢大学)	佐々木修吾(GIGAスクールサポーター)
12	生活(衣食住)・福祉	林俊伍((株)こみんぐる)	
13	表現・デザインなど	土居佑治(書家)	
14	国際(異文化理解・多文化共生・国際課題)	堤敦朗(金沢大学(元WHO技術専門官))	

## 2. 先導的なカリキュラム開発について

### (1) 国際教養 基礎

#### ①目的・ねらい

学校設定科目「国際教養 基礎」の目的は、グローバル人材の素地を築くことである。

WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校の申請にあたり、SGH 事業で培った取り組みをどう活用し、発展させるべきかが課題となった。全国的な課題である世代交代の波に、附属高等学校も多分に漏れず直面している。WWL 事業として、まったく新しい価値創造が求められる一方で、遺産の継承も責務である。教員数 22 名で学校を運営し、一任制で展開している科目も多い現状で、更なる研究開発を強ければ、授業を圧迫し、生徒の不利益になりかねず、また、各教科科目が 5 年間取り組んだ教科 SGH 化が過去の遺物と化してしまう可能性も高かった。教科のカリキュラムに負担をかけずに、研究成果を実践し、また、新たに先進的な取り組みを実験する機会の必要性が高まっていた。時を同じくして、総合的な探究の時間において、アカデミックな個人研究カリキュラムが始まり、生徒の専門性が高まる一方で、研究対象の分野以外に対する知識の乏しさを懸念する声も高まった。

こうした背景を受けて、専門研究を推し進める一方で押さえるべきスキルやコンピテンシー、マインドセットを教授し、教科の枠を超えて、各教員の強みを生かすことのできる授業として「国際教養 基礎」が設定された。

探究的な学びには、「実践」と「理論」の往還が必要だと考え、「国際教養 基礎」では生徒が「体験的」に理論を学ぶことを目標としている。ここでの「理論的アプローチ」とは、探究活動を深めていくための研究手法（スキル）や、習得したスキルを必要に応じて選択し用いるために必要な資質・能力（コンピテンシー）、課題に対して当事者意識を持つなどの意識改革（マインドセット）のことを指している。「国際教養 基礎」で培った資質・能力（コンピテンシー）は「総合的な探究の時間」だけでなく、各教科科目、学校行事、校外活動など、様々な場面で発揮され、「理論」と「実践」の融合がスパイラル的に展開されていくことを期待している。

#### ②方法

教育課程では 1 年次に 1 単位。実際には 1 年次の総合的な探究の時間（1 単位）と合わせて金曜日の 5、6 限を使って弾力的に運用している。例えば、ある週は総合の時間が 2 時間、またある週は国際教養の時間というように行っている。

## ②実施概要

昨年度は、1学年(120人)一斉に大教室で行うこともあった。しかし、令和2年度は新型コロナウイルス感染対策として、大教室で授業を行うことができなくなった。そこで、Zoomを活用し、各クラスで配信する授業もあった。

実施日	授業タイトル	授業者	目的
6月1週	シックスハット法	真木 (オンライン)	思考ツール
6/26	NASA ゲーム	真木 リモート一斉	協働マネジメント
7/10	恋のフィールドワーク	真木 リモート一斉	課題設定
7/27	Global Leader Crosstalk	三谷産業社長 リモート一斉	グローバルマインドセット
8/21	アナ雪を探究する	真木 リモート一斉	探究モデル
9/4	都道府県地図を作ろう	塚田 各クラス	マインドセット
9/18	パワポ/動画作成について	真木 リモート一斉	パワーポイント作成
10/9	話し方講座	塚田 真木 各クラス	プレゼンテーション
11/11	愚者が世界を救う	真木 リモート一斉	分野横断 (主流派経済学+数学モデル+心理学=行動経済学)
11/20	如月祭 2020	真木 リモート一斉	地域還元マインドセット
12/10	東日本大震災	中澤 各クラス	マインドセット
1/15	factfulness	塚田 各クラス	マインドセット/クリティカルシンキング
1/29	How to be persuasive	真木 リモート一斉	帰納的論証
2/19	factfulness2	塚田 各クラス	マインドセット/クリティカルシンキング

### ③成果と課題

令和2年度もカリキュラム開発と実践を並行して行った。当初は17回の開講を計画していたが、13回の実施にとどまった。ただ、休校期間があったことを考えれば、まずまずの成果であったと言える。

来年度以降も、継続してカリキュラム開発を行い、総合的な探究の時間との親和性がより高まるよう工夫していく。そして、実社会で求められているスキルを陶冶できるカリキュラム開発も進めていく。来年度以降も、①「今年度実施した授業の改善」②「金沢大学附属高校教員による実践的／先進的取り組み」③「社会人との協働授業」の3本柱でカリキュラム開発を行っていく。

## 3. 高校生国際会議について

当初の計画では、令和3年度に高校生国際会議を開催する予定であったが、1年前倒しにし、令和3年3月20日に小規模ながら、実施することとなった。

最初は、NJCの生徒が参加する予定であったがスケジュールが合わず、急遽、附属高等学校の留学経験のある生徒などのつてをたどり、何とか実現できることとなった。以下にその要項を示す。

### 令和2年度 高校生国際会議 実施要項

#### 1. 目的

- グローバルな社会課題について、北信越地方の高校生が社会人や海外の高校生と対話することを通じて、自身の行動や価値観を見直すとともに、会議後の行動変容に繋げる
- 国や地域を越えて、高校生が継続的に学び合うとともに、その学びを支援する教職員も含めたコンソーシアムを構築する

#### 2. 概要

- 国や地域の枠を越えた共通の社会課題を発見し、助言者の支援を受けながら、その課題に対する認識を深めたり、解決策を構想したりする
- 会議を通じて「高校生行動宣言」を採択し、会議後もゆるやかに繋がりながら、それぞれのフィールドで課題解決に向けた探究を重ねる
- 次回の高校生国際会議でその後の進捗状況や成果・価値を共有する

#### 3. テーマ

「パンデミックの時代に私たちはどう生きるか」

##### 分科会A. 地球温暖化と異常気象、災害

近年猛威を振るう感染症の原因や背景を、地球温暖化や人口増加といった観点から捉え、現代の世界に対する認識を深めるとともに、私たちがこれから何を学び、どう生きてゆくべきか考える

##### 分科会B. 科学技術のこれから

新型コロナウイルス感染症拡大の中、ワクチンやアプリの開発が進んでいる。本会では科学技術のあり方や可能性について議論する

##### 分科会C. コロナ禍で考える私たちの学び

突然かつ長期の休業経験やオンライン授業など、異例づくめの1年を経て、新型コロナウイルスは私たちの社会にどんな変化をもたらしたのか、これからどうなっていくのか、こんな時代に私たちは何を学ばねばならないのかなど、学校生活をベースに検討する

##### 分科会D. 高校生ソーシャル・イノベーション

パンデミックをはじめ、課題山積の現代社会にこそ、高校生の柔軟な発想が必要とされている。グローバルな社会課題に挑戦する新たなプロジェクト始動を目指す

#### 4. 参加校（依頼校）

主催：金沢大学，金沢大学附属高校

○WWL 事業国内連携校

金沢泉丘高校，金沢二水高校，小松高校，七尾高校，高岡高校，高志高校

○北信越フォーラム参加校

長野県長野高校，長野県上田高校，福井県立敦賀高校

○海外参加者

海外在住の外国籍を有する学生 等

#### 5. 期日・日程

令和3年3月20日（土・祝）オンライン開催

9：30 接続開始

10：00 主催者代表挨拶ー金沢大学学長 山崎光悦

10：03 開会宣言ー金沢大学附属高校校長 中澤宏一

10：06 趣旨説明・日程確認

10：10～14：15 分科会

～10：40 アイスブレイク

～12：15 午前の部

①助言者から参加生徒の関心に沿った話題提供

②今後半年で実現したいことについて対話

(※12：15～13：00 昼食休憩)

～14：15 午後の部

①アクション・プランの策定

②連絡方法の確認

14：30～15：20 全体会

①プロジェクト内容披露・行動宣言採択

②コメントー日本医科大学特任教授 北村義浩

株式会社ガクトラボ代表取締役社長 仁志出憲聖

15：30 閉会

#### 6. その他

○本事業の企画・運営は，下記アドバイザーに協力を依頼しています

・合同会社楽しい学校コンサルタント second 代表

金沢大学附属高校 WWL カリキュラムアドバイザー 前田健志氏

・株式会社ガクトラボ 代表取締役社長 仁志出憲聖氏

○次年度は令和3年8月に開催予定です

## ●石川県立金沢泉丘高等学校における取組

### ① SDGs を題材とした特色ある取組について

- ・学校設定科目「SG 思考基礎」におけるグローバル課題の研究  
文理融合を掲げ、公民と理科のティームティーチングにより、社会課題を題材に生徒に考察させる授業を実施。1 学期には、エネルギー問題をテーマとして、実際に太陽光発電に関する実験をデザインさせ、その課題を考察させるとともに、科学的なリテラシーを学ばせた。2 学期以降は、SDGs を入り口としたテーマをグループごとに研究させ、発表させる授業を実施した。
- ・「総合的な探究の時間」における課題研究  
1 年普通科の課題研究では、デザイン思考の手法を使って「身近な問題の解決」をテーマとしたグループ研究を実施。  
2 年普通コース文型と理型の一部では、金沢市が取り組む「金沢ミライシナリオ」を題材として、SDGs 達成のためにどのような問題解決が考えられるかを研究し、実際に金沢市役所職員に対して発表を行った。  
2 年 SG コースでは、SDGs を切り口としたグローバル課題の解決を研究テーマとし、令和 2 年度からはプロジェクト型学習（PBL）という形で、実践を前提とした研究に挑戦した。残念ながら、コロナ禍の令和 2 年度は、十分なフィールドワークや実証実験を組み込んだプロジェクトが思うように実施できず不十分な研究となってしまった感は否めない。
- ・1 年「探究フィールドワーク」の実践  
新たな授業の試みとして 10 月に 1 年生全員を対象に「探究フィールドワーク」を実施。英語で事前学習をした「海洋プラスチックごみ」の問題について、実際に能美市の海岸に行き、ボランティア清掃を兼ねてマイクロプラスチックの採集を行い、SG 思考基礎で観察と分析、現代文の授業でレポートにまとめるといった教科横断型の授業を展開した。今後、さらに多くの科目を巻き込みながら発展させることで、新たな教科横断的で実証的な学びのあり方を探っていきたいと考えている。

### ② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

- ・高大連携  
金沢大学、東京外国語大学の留学生にオンラインで参加していただき、3 年 SG コースの課題研究成果発表会を実施した。また、2 年 SG コース生に対しては、京都大学総合生存学館（思修館）の大学院生 8 名によりオンラインで 2 回にわたり研究指導を受ける機会を設定、1 月の研究発表会にもオンラインで参加、研究成果に対する講評をしていただくサポートを得た。
- ・実践的な英語力の養成  
学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」等を通して、実践的でコミュニケーション英語の授業に取り組んでいる。題材もグローバル課題を扱うことで、より社会課題への意識を高める役割も担っている。  
また、1 年生全員を対象にオンラインで国内の外国人留学生（金沢大学、東京外国語大学、早稲田大学）を相手に英語で互いの文化の紹介を行う「Discussion Day」を実施した。
- ・グローバルリーダー養成講座の開催  
希望者を対象とした様々な特別講義やワークショップを実施することで、グローバルリーダーを志す生徒を増やす働きかけを行っている。令和 2 年度は、1 年間の海外留学から帰ってきた石川県立金沢泉丘高等学校生徒 5 名をプレゼンターとして、その体験や気づきを語ってもらう「グローバル体験報告会」、JICA に勤務する金沢泉丘高校卒業生をオンラインでつないで「セカイで活躍する卒業生 in カンボジア」、熊本高校がWWL 事業として実施した「オードリー・タン氏と高校生の交流シンポジウム」視聴、英語で社会課題について議論する「ボストン・ハーバード・フォーラム」等を実施した。
- ・学校を越えた学びの交流の促進  
長野県上田高校のWWL 事業「北陸新幹線サミット」に 3 年 SG コース 3 名が、立命館宇治中・高校のWWL 事業「FOCUS」に 2 年 SG コースから 4 名がオンラインで参加し、全国

の高校生と探究活動をテーマとして交流した。また、3月には、金沢大学主催の「高校生国際会議」に1年生が、「高校生探究成果発表会」と関西学院大主催の「探究甲子園」に2年SGコース生が参加する。

石川県内では、開催形式がオンラインでの動画公開に変更された「NSH課題研究発表会」に、普通コース文型3グループが参加した。

また、2年SGコース生が企画・運営した「SDGs×TEENSサミット」には金沢大学附属高校生を中心に他校生が16名参加し、オンラインで社会課題について議論する機会をつくった。

・全校的な探究スキルの開発と共有のための行事「探究の日」の創設

3月に1年生・2年生の課題研究の発表を行うだけではなく、課題研究の経験をもとにしたコツや意義を2年生から1年生に継承・交流するプログラムとして「探究の日」を新設。生徒間における探究の方法等の共有のみならず、教員の指導力向上もねらいとしている。

探究型学習をテーマとした職員研修を1年学年団および若手教員を中心として3回実施。探究を軸としたカリキュラム・マネジメントのあり方やデザイン思考による課題解決、よい問いの立て方等についてワークショップを通して学ぶ機会を持った。また、課題研究指導の手引きを作成し、探究プロセスのステップごとにおける指導のポイント等について教員間で共有できるようにした。

③ その他（達成状況、課題等）

・コロナ禍への対応から見える可能性と限界

海外研修や課題研究における積極的なフィールドワーク等、これまで構築してきた様々なプログラムは、令和2年度のコロナ禍の影響で中止または大幅に縮小せざるを得なくなった。いかに、現地に足を運び対面で経験をしたり学ぶことが価値のあることなのかを再確認させられた一年と言える。生徒の学びを、これまでの生徒の学びと比較したときに、明らかにその厚みが足りないと感じている。とはいえ、学びをゼロにするのではなく、たとえ従来と比べて少なかったとしても、機会をいかに保証するのかに挑戦し続けた一年であったともいえる。その方法としてオンラインによる代替措置を活用することとなったが、当然ながら対面方式には劣るものの、一方で環境さえあれば簡単に地域や国を超えることができるというメリットもあることを改めて認識できた。今後コロナ禍が収束したポストコロナにおいては、オンラインとオフラインのハイブリッド型を追求していくべきであると考えている。

## ●石川県立金沢二水高等学校における取組

### ① SDGs を題材とした特色ある取り組みについて

#### (1) 模擬裁判実習 2年生人文科学コース（40名）生徒対象

総合的な探究の時間に行う課題探究活動の一端として、4月から6月上旬まで10時間をかけて、金沢弁護士会の弁護士より指導を受けながら学ぶ。「平和と公正をすべての人に」の目標達成のため、裁判に関わる基礎知識を学ぶとともに、実習を通して公正さとは何かを考察する機会とする。複数の弁護士を学校に招いての学習と、金沢大学の法廷教室に出向いての実習授業を行う。

ただし、令和2年度はコロナ禍による休校が続き、8月中旬から9月下旬に実施した。実習も学校内で行った。

<ねらい>

- ・資料を読み込み、証人と被告双方の主張とその根拠となる証拠を収集する。双方の立場での主張の整合性と問題点を分析する。【課題の設定】【情報の収集】
- ・論告と弁論をまとめ上げるため、多くの事実を整理分析しながら自分の考えをまとめ、信用性の高い発表を作り上げていく。【整理分析】【まとめ】
- ・実際の法廷の場で、相手に伝わるように工夫しながら表現する力を身につける。【表現】

<日時と内容>

- |        |          |   |
|--------|----------|---|
| 第1・2時  | 8月20日（木） | ・刑事裁判の基本原則と法曹三者の役割を学ぶ<br>・三角ロジックを学ぶ<br>・刑事裁判手続きの流れの概説<br>・模擬裁判選手権の教材の読解 |
| 第3・4時  | 8月27日（木） | ・ブレインストーミング：積極事実消極事実の抽出<br>供述の信用性の検討<br>・論告と弁論の検討①                      |
| 第5・6時  | 9月3日（木）  | ・論告と弁論の検討②③   |
| 第7時    | 9月10日（木） | ・論告と弁論の検討④  |
| 第8～10時 | 9月24日（木） | 模擬裁判実演実習  |

<学習効果>

- ・刑事裁判に関して弁護士から直接学ぶ機会の貴重さを実感できた。
- ・裁判を模した教材を利用して、読解力と分析力、発表の構成力を学ぶことができた。
- ・模擬裁判を実演することで、知識と理解を実践的に活用する機会を得た。

#### (2) グローバルソリューション 2年生人文科学コース（40名）生徒対象

課題探究活動を行う総合的な探究の時間を「グローバルソリューション」という科目名とし、SDGsに掲げられた目標の解決に資する課題の設定や考察を行う。ただし、規模の大きすぎるテーマでは高校生の力での解決は困難なことから、学校生活や地域社会の中で取り組める課題を取り上げるようにしている。

令和2年度は、「身近な生活の中でできる衣料廃棄削減への取り組み」、「地元近江町市場に地元客や高校生に来てもらうには」、「買い物用エコバッグは果たして感染対策は万全か」といったテーマに取り組む班があった。「産業と技術革新の基盤をつくろう」「住み続けられるまちづくりを」「つくる責任つかう責任」等の目標につながる考察を深めた。

#### (3) グローバルゼミ 2年生人文科学コース（40名）生徒対象

上記グローバルソリューションの一環として、11月19日（木）午後、金沢大学に学ぶ留学生2名と元留学生1名とのオンラインでの交流機会を持った。課題探究で取り組むテーマについて意見交換をしながら、交流と考察を深めた。例年は、講義科目「日本の教育」の受講学生の派遣を国際機構の斉木麻利子教授に依頼し、多数来校していただいているが、令和2年度はやむを得ず非対面型で実施した。石川県立金沢二水高等学校生徒の修学旅行先は海外である

が、令和2年度はそれも中止となり、この行事が唯一の国際交流の機会となった。大学生、そして外国人としての視点から多くの意見と助言をもらうことで、視野が広がり、課題探究のテーマに対して複眼的な見方が出来るようになった。



●石川県立七尾高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

(1) B探究Ⅰに係る講演会Ⅱ

①参加生徒 11H生徒 40名

②目指すべき姿・つきたい力

SDGs の意義と本質を知ると同時に、次年度に SDGs の視点から探究活動を進める基礎を学ぶ。

③日時内容

日時：12月17日（木）10：40～12：30

講師：清水 義彦 氏（富山県立大学工学部准教授）

内容：2030SDGs 公認ファシリテーターを講師に招き、国連が定める SDGs（持続可能な開発目標）についての講演やカードを使用したワークショップを体験する。

④生徒の変容

<生徒アンケートより>

Q1. SDGs の目的や意義について理解できた。

Q2. SDGs の観点を今後の課題研究に盛り込むことができますか。

<生徒の感想>

● 自分のやりたいことや将来、これからの進路などについて考えるよい機会になったと思う。18フェスの人達を見て、自分のやりたいことに熱い思いをもって全力で歌う姿がとても輝いて見えた。SDGs の観点を自分の将来に活かすことが出来るとはじめて知ったし理解することができた。まずは自分のゴールを決めてそこから逆算してこれからの自分の進む道を決めていこうと思った。

● 経済、社会、環境、誰も置き去りにされない SDGs また、進路の話では、バックキャスト思考法というのを知り、目から鱗という感じだった。逆から考えるのか！という感じだった。そして、探究活動への意欲もでてきた。自分のやりたいことを見つけるために積極的に取り組もうと思った。ゴールを決めたらとことんするというのを大切にしようと思った。

(2) 「能登の里山里海」特別講座

①参加生徒 1年生 240名

②目指すべき姿・つきたい力

世界農業遺産に認定された能登には、豊かな里山里海が広がっているが、そこに住む地元民の暮らしと自然のつながりが希薄になってきている。本講義を通して、自然と私たちの絆を取り戻す活動について学ぶことでふるさとに対する理解を深め、将来地域に貢献したいと希望する人材を育成する。

③日時内容

日時：11月3日（火）13：15～15：05

講師：山下 良平 氏（石川県立大学生物資源環境学部環境科学科 准教授）

内容：世界農業遺産に認定された能登の里山里海は、文化資源や伝統を維持と保全の両立が必要である。講師の研究成果も交えながら SDGs の目標「15. 陸の豊かさを守ろう」を能登の里山里海で学ぶ。

④生徒の変容

<生徒アンケートより>

Q1. 講義の内容について理解できた。

Q2. 里山の重要性について理解できた。

Q3. ふるさとに対する理解が深まった。

Q4. 将来ふるさとに貢献する意欲が湧いた。

### <生徒の感想>

- 今までグローバル化に競争の理念の裏に排他的という面があったことを考えたこともなかったのに、興味深かった。ふるさとを守るには自分の理想だけではどうにもできないこと、説得力のあるデータを示すことの重要性が学べた。
- 里山里海は国土の保全、自然環境の保全、景観農産物の供給において様々な役割を果たしてくれるように多面的機能が備わっていたり、人々にとっては必要なものでもあるから守る必要があるとわかった。農地を農地として使えなくなったりすると、そこにはほかからの干渉を受け、伝統的な里山里海が失われ別のビジネスの道具として扱われてしまう恐れがあるともわかった。石川は里山里海が両方とも備わっており、そんないい場所で育った自分は確かにこの自然が失われてしまうのは嫌だと感じた。今ではほとんどが高齢者の集落となってしまった所もあり、このままでは人が減り人との共存が大切である里山里海はその役割を失ってしまうとわかった。そんなことにはなあって欲しくないから、なくなって後悔しないように環境のための活動に積極的に参加してみたりして地元の人、社会の人が里山里海に関われるように頑張っていきたいと思った。

### ② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

#### (1) 「スピークアウト」における留学生との交流 I

①参加生徒 11H生徒 40名 21H生徒 39名

#### ②目指すべき姿・つきたい力

留学生との対話を通して外国の方から見た能登の印象や可能性について理解を深め、今後能登について世界に発信するための情報収集及び発信する力を高める。また、留学生とのインタビューを通して生徒の英語によるコミュニケーション力を高める。

#### ③日時内容

日時： 9月 4日(金) 10:40～15:05

11月20日(金) 10:40～15:05

3月19日(金) 10:40～15:05

講師：金沢大学留学生20名

内容：金沢大学に在籍する留学生に対して、探究活動を進めるためのインタビュー活動および質疑応答を行う。

### <アンケート結果>

- Q1. 留学生とのセッションを通して、他国の文化や生活について知ることができましたか。
- Q2. インタビューを通して、今後の探究活動に活かすことができる情報を得ることができましたか。
- Q3. 英語でのインタビューを体験して、今後伸ばしていきたい英語の能力はどれですか。
- Q4. 英語でのインタビューを体験して、英語学習への意欲は高まりましたか。

### <生徒の感想>

- 中国の方は特にフードロスについて深刻な見方をしていたように感じた。中国のレストランなどでフードロスに関するポスターがあることや買い物の際はメモしたもの以外は買わない、食べられなかった分は容器に入れて保存する、友人とシェアするなど、インタビューを通して知ることができた。
- 本人の立場だけを考えるのではなく、外国人の立場にも立つことで、見逃していた重要点や、改めて分かる重要点を知ることが出来たので、とても有意義でした。

(2) 課題研究の概要を伝える動画を作成し、動画配信サイトを通じて他校の生徒へと発信した。

(3) NSH 通信を七尾高等学校の HP に掲載して情報を発信した。

### ③ その他（達成状況、課題等）

生徒が課題研究を進めるために、現在ある取り組みを取捨選択し効果的なカリキュラムを考案する。

●富山県立高岡高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

昨年度に引き続き、2年普通科の「総合的な探究の時間」を使って「SDGsについて理解を深め、自分たちの身の回りに存在するSDGsに関連する問題に目を向け、その解決方法を探究する活動」を実施した。

当初の予定では、1学年3学期から活動をする予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校のため、計画を変更し6月より活動を開始した。以下に実施計画を示す。

時期	項目	備考
1学期	SDGsについて意識する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休校中の課題として17のテーマに関する新聞記事の切り抜きを指示</li> <li>・学校再開後の班編制（課題研究Ⅰ）に反映させた</li> <li>・富山県立大学工学部准教授の清水義彦先生から、SDGsについての講義を2回受けた。</li> <li>・校内発表会を実施</li> </ul>
2学期	(SDGsを含む)社会の諸問題について聴講、  個人やグループで研究し、発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『2020年度 出前県庁しごと談義』（富山県）を活用し、8講座から各自1つを聴講し、その内容についてグループ（5人班）でまとめ、クラス内で発表し、共有する</li> <li>・後半（課題研究Ⅱ）は、自由テーマとし、グループまたは個人研究を実施</li> </ul> 10月21日課題設定報告会 12月11日校内発表会 レポートの提出

② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

新型コロナウイルス感染症の拡大のため、例年実施している2年生を対象とした海外研修は中止せざるを得なかった。1年人文社会科学科・理数科学科を対象とした科学探訪は例年、首都圏で行ってきたが、富山県内を中心とする施設等で実施予定。

③ その他（達成状況、課題等）

この活動の目的は、学習指導要領にある「豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手となる」ための『学力』を身につけようであった。ここでの『学力』とは、探究力（幅広い視野での関心・知識、情報を収集・選択・活用する力、課題解決のための思考力・判断力）豊かな人間性（自ら行動する主体性・積極性、協調性・コミュニケーション能力、意見を人に伝える情報発信力）を意味する。これらを磨くための一つ的手段として「SDGs」をテーマとした課題研究に取り組むこととした。調査研究はグループ活動が中心で、文献研究や情報収集が主な手段ではあったが、アンケートを採用する班が多数あり、校内各教室に複数のアンケートが置かれることになった。この点からも、情報を収集・選択・活用する力がついたのではないと思われる。取組を振り返る意識調査においても、批判的思考力・情報活用能力が身についたとする生徒が多数みられた。また、情報発信力をつけ、全国海洋教育サミットにオンライン参加した班もあった。

2学期（課題研究Ⅱ）では全班に講評担当（研究担当は別）の教員を割り振った。質問し、良かった点と改善点を示してやることで、自分達本位の発表に終わらず客観的な視点が得られ、調査研究活動を振り返ることができたのではないと思われる。

引き続き「答えのないものに取り組む」「複数の立場がある中で自分は何を選択するか」という研究・発表を目指していきたい。

## ●福井県立高志高等学校における取組

### ① SDGs を題材とした特色ある取組について

#### (1) 課題研究・海外・国内フィールドワークについて

課題研究に関する学校設定科目である「K o A - S (グローバル)」では、福井県立高志高等学校2年生グローバル選択生徒63名が、前年度に引き続き「世界に発信!! 高志生がつくるコラボ商品」をテーマに、県内企業と協力して、福井の良さを国内外に発信できる商品やサービスの開発・提案を行っており、これは、SDGsの目標8(「働きがいも経済成長も」)や目標17(「パートナーシップで目標を達成しよう」)に該当する。

海外・国内フィールドワークに関しては、生徒たちは以下の海外・国内の計4コースから1つを選び参加する予定であったが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により研修を中止せざるを得なかった。代替の国内フィールドワークも計画したが、こちらも同様の理由で中止となった。

#### 【予定されていた海外・国内フィールドワーク】

タイ研修 … カセサート大学附属マルチリンガルプログラム校訪問研修(交流提携校)  
(ホームステイ含め4日間)

現地大学訪問研修・企業研修・歴史文化研修

ベトナム研修 … ドンズー日本語学校ビンミー留学センター訪問研修

現地高校及び大学訪問研修・日系企業研修・歴史文化研修

オーストラリア研修 … スインバン大学訪問研修(ホームステイ含む)

マウントウェイブレイ校訪問研修・歴史文化研修

東京研修 … 筑波大学附属坂戸高校訪問研修・大学訪問研修(立教大学等)

TOKYO GLOBAL GATEWAY 訪問研修・企業等訪問研修

#### (2) 大学・企業・団体との連携

##### ① 福井大学地域創生推進本部との連携

上記機関からは平成27年度から課題研究に関する指導・助言等を頂いており、専門的な見地からオリエンテーションや仮説の設定、中間報告会、最終報告会など様々な面で指導・助言を頂いた。特に福井大学地域創生推進本部の竹本拓治教授には、企画段階から様々な助言を頂いており、高志高等学校の課題研究がより充実したものとなっている。

##### ② 福井経済同友会との連携

福井経済同友会からは1年次での外部講師連携授業において、講師を紹介して頂いており、これまでに主にグローバル展開している延べ6社(日華化学株式会社・第一ビニール株式会社など)と連携授業を実施している。2年次での課題研究においても、協力企業の紹介をして頂いている。

#### (3) 人的交流

東・東南アジアの様々な国の高校生と問題解決力や自発的な行動力を高めるとともに、グローバルな感覚を養い、価値観の多様性を学ぶことを目的として、令和2年度はイオン1%クラブが主催する「アジアユースリーダーズ2020」に参加した。令和2年度は「コロナ禍に伴う学校教育上の課題と改善点・打開策」をテーマに議論を行い、その内容はSDGsの目標4(「質の高い教育をみんなに」)や目標10(「人や国の不平等をなくそう」)に該当する。

### ② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

#### (1) 海外の高校等との交流について

高志高等学校は、平成27年度よりカセサート大学附属マルチリンガルプログラム校と交流協定を結んでおり、令和2年度も高志高等学校を訪問する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。

#### (2) 英語における学校設定科目の改変について

探究学習を英語運用面から支援するための科目として設定した学校設定科目を、以下のよう  
に改変する予定である。

記号	科目名	単位数					備考
		1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系	
ア	英語活用B E (Basic Expression)	3					
イ	英語活用A E (Advanced Expression)		3	2			AE・RP・DD より1科目 選択
ウ	英語活用R P (Research & Presentation)		3	2			
エ	英語活用D D (Debate & Discussion)		3	2			
オ	英語表現C W (Change the World)				2	2	C W・C W+よ り 1科目選択
カ	英語表現C W (Change the World) +				2	2	

令和2年度、3年次に「英語理解T W」(Today's World)および「英語表現C W」(Change the World)を選択制で開講したが、来年度は生徒全員の英語表現力をより高めるために、英語による発信を主体とした「英語表現C W」(Change the World)に一本化する。

### ③その他（達成状況、課題等）

#### （1）達成状況について

高志高等学校では「グローバルな視野で新しい分野に挑戦し、地域社会にイノベーションを起こす人」を育成する人材像として掲げ、以下の資質・能力を生徒に身につけさせようとしている。

【資質】①社会問題の解決に向けて、異なる立場の人たちとの衝突や混乱を乗り越え、協働して挑み続ける意識や行動。

②自国文化や異文化を理解した上で、新しい価値や文化を作り上げて、社会の発展や平和に貢献しようとする意識や行動。

【能力】①論理的思考力、批判的思考力、問題解決能力。

②創造力、協同・協調力、傾聴力、情報活用能力。

令和2年度12月に実施した「GPS-Academic」では、昨年度と比較して協働的思考力や創造的思考力の上位層の減少が見られ、目標の達成には十分ではなかった。原因として新型コロナウイルスの感染拡大にともなう休校で課題研究の授業数が減ったことや、各種研修の中止が考えられる。

#### （2）今後の課題について

新型コロナウイルスの感染拡大が収束しない中で、来年度の海外フィールドワークの中止も決定している。そのため、代替の国内フィールドワークの実施や海外の高校とのオンラインでの交流など、生徒が国内外の人々との交流を通して、チームで協力して社会問題の解決に取り組む活動を確保したい。